

Chapter 06: ニセモノへの先手

無事3日間のイベントも終了し、来場者も期間内20万人を超え、警備体制や管理体制には多くの反省を残すものの様に高評価であった。またメンバーはそれぞれ多くの成果を得ることとなる。

それから3ヶ月が経過し、突然福山の元に江田島から電話が入る。



福山さん、最近急に販売が低下してきてもう飽きられたのかと思っていたのですが、どうやら類似品がどんどん出てきて、当社の半額程度で販売をしているようです。



それは困ったものですね。



しかも、デザインは当社の柄を模倣した型押し品です。質は悪く〈SAMON〉の価値を落とすことにもなっていて・・・相談する先がなく、また福山さんを頼ってしまい申し訳ありません。



いえ、それは良いですよ。さて・・・これは有名税とも言えますが、対策はいくらでもあります。



本当ですか！



最初にお会いした際に〈SAMON〉の名称を他の誰かが使っているか調べましたね。



はい。



その際に私の方で商標権と意匠権の取得手配をさせて頂きました。登録料をお支払い頂く時、「高いですね」と言われていたのを覚えておられますか。



まだ販売も始まっていないのに、20万円以上も支払うのはいかなものかと正直不安でしたので・・・。



それが今となっては大きく効果を発揮してくるのです。〈SAMON〉は、名前とそのデザイン性を国が権利と認めてくれています。そのため、類似品の販売差止めを行なうことができます。



そうなんですか・・・安心しました。



今からその手続きをしましょう。弁護士に依頼するにあたり費用は数万円かかりますが、大丈夫ですか。



もちろん！〈SAMON〉の価値を下げないためにも、よろしくお願いします。

福山は知人の弁護士に依頼し、江田島の了解を得た上で差止め請求を各社へ送りつけた。同業者は途端に販売を中止し、再び〈SAMON〉の売上は回復していくのであった。

それから1年後、2年目のイベント初日に、福山は江田島を訪ねて砂紋と夕日の街へ足を運ぶ。

江田島の会社は年商2億を超える規模に成長。東京にも出店し、財布、バックの他にライダースーツや帽子までバリエーションを広げ、レザー専門ブランドとしては業界で少しは知名度を獲得できるまでになっていた。

そして、2年目のイベントが始まる――